



「我々は、地球を救う機会をもつ

最後の世代になるかもしれない」～校長先生・朝礼講話より～

弥富木曾岬インターチェンジの南に木曾岬干拓地メガソーラー発電所という太陽光発電所があるのを知っていますか。木曾岬メガソーラー株式会社がこの太陽光発電の施設を扱っているのですが、この会社は、弥富市内の小学校に平成 27 年度から、中学校には平成 29 年度から、地域貢献事業として毎年、理科の実験用具を寄贈してくださっています。紹介が遅れてしまいましたが、本校への寄贈も 3 年目になります。

先日、本年度の地域貢献事業として理科の磁針修正トレー（方位磁針付）を寄贈していただきました。その社長さんとの会話の中から、今日は話をしたいと思います。

以前、政府が太陽光発電の優遇措置をなくし、これ以上、太陽光発電施設を増やさない方針を取ったというニュースを聞きました。先生は、なぜ、太陽光発電をこれ以上増やさないのか不思議に思っていました。そこで、そのことを社長さんに質問しました。

太陽光発電は、天気によって発電量の調整がきかないし、夜間の発電ができない。火力発電は、0（ゼロ）から最大発電量まで自由に調整できる。このことが理由だそうです。また、火力発電は基本的に日中は稼働していないことが多いそうです。

しかし、火力発電所の主な燃料は「石炭」で環境にはよくないですよ。そこで、この先、環境にも考慮し、再生可能（持続可能）なエネルギーとして考えられているものは何かを質問しました。

この先は、バイオマス燃料を使った火力発電が考えられているそうです。2023 年 8 月を稼働目標とした計画が進んでいるそうです。バイオマスとは、動植物から生まれた生物資源（含ゴミ）の総称で、これらの資源から作る燃料をバイオマス燃料と呼びます。作られる燃料は、ペレットなどの固体燃料、バイオエタノールやBDF（バイオディーゼル燃料）などの液体燃料、そして気体燃料と様々なものがあります。なぜ、バイオマスなのか。それはカーボンフリーだからです。つまり、この燃料は二酸化炭素を循環しているものだから、新たに二酸化炭素を排出することにはならないから、環境にやさしいということになります。



その時、一緒にみえた愛知県地球温暖化防止活動推進センターの事務局長さんの名刺には、「1 枚につき 100 g のオフセットクレジットがついています」と書かれていました。その名刺の紙は広島折り鶴の再生紙でした。オフセットクレジットとは、環境省が 2008 年から始めた制度です。石炭や石油を木片などの燃料に変えて二酸化炭素排出量を減らしたり、間伐などの森林整備で二酸化炭素吸収量を増やしたりした事業者は、認定を受ければ吸収・排出量をクレジットとして売ることができ、二酸化炭素排出量を減らすことが難しい企業は、クレジットを買うことで排出量の全量や一部を相殺（オフセット）するという形で協力することができる制度です。



12 月 4 日の中日新聞の夕刊に、今日の話に関連したニュースがありました。日本が「化石賞」という不名誉な賞を受賞したというニュースです。これは、世界の環境団体でつくる「気候行動ネットワーク」が地球温暖化に後ろ向きな姿勢を示した国に贈る賞です。日本の授賞理由は二酸化炭素の排出が特に多く温暖化を悪化させる石炭火力発電の利用を続ける政府方針を改めて示したことです。皆さんにも、気候温暖化のこと、環境破壊のことなど、それぞれ、いろいろと考えてほしいと思います。先生は、先回お話しした「我々は、地球を救う機会をもつ最後の世代となるかもしれない」という言葉が浮かびました。